

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	鮮満瞥見記 : 文苑
Author(s)	木下, 國助
Citation	龍南, 177: 117-128
Issue date	1921-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7772
Right	

鮮滿瞥見記

木 下 國 助

「外國へ一度は」と云ふ宿念は遂に鮮滿支旅行となつて、實現の運びに至つたのである。

忙しい學期試験の勉強の最中でも心は何時しか彼の地に飛んで朦朧たる想像の中に、夢の様な朝鮮人の風俗、寫眞で見た支那式の家が浮かんで去り、去つては又現れるのであつた。計畫は出來た

七月二日夜下關發——三日朝釜山着 書釜山發

——同夜京城着——四日京城見物——五日元山

へ——直ちに汽船接續六日朝長箭着——八日迄

金剛山探勝——九日夕平康より汽車にて發し夜

京城着——十日仁川往復——同日夜北上——十

一日未明平壤着——同日平壤見物 鎮南浦往復

——十二日未明平壤發——同日午後新義州着

——同日鴨綠江見物の上夜安東發——十三日晝

撫順着——同日炭坑見物の上奉天に泊——十四

日奉天見物の上同夜出發——十五日朝大連着

同日市内見物——十六日旅順往復——十七日（

第一解散）同夜北京へ出發——十九日朝天津着

同日市内見物して泊——廿日北京へ——廿日廿

一日北京見物……青島方面の者は廿二日朝北京

發濟南を経て廿四日青島着……上海方面の者は

廿二日夜北京出發漢口南京を経て廿九日上海着

計畫は勿論時に應じて變更することを豫期して居

たが實際の行動は、意外なる障害が起つて、意外

なる變化を餘儀無くせしめられた。

用意は備つた。……その夜の事である。梅雨の

晴間から十五夜に程近い月が、青白い光を投げて

萬相を穩かな曲線の中に包んで居る。今宵から故

里を離れて旅立つ浮浪者の同情者とし慰安者として常に同じ様な温い光を投げて呉れることであらう。

大陸を踏む迄――

七月三日 午前三時廿四分上熊本驛を出た。荷物と云つても、鞆につめた服一着、肌着替、それに案内書類、地圖、筆紙寫眞器等と傘。身輕に門司驛で下車して中野、上村、村山の三君に會ふ。荷の都合、切符の都合で夜の汽船に乗ことにする。下關に渡つて八時頃船に乗込む、學生の貧乏鞆は少しも税關で檢べられない。荷物の底迄掻き廻されて當惑相な顔をして居る他の客を尻目にかけて眞先きに船室へと飛込んだ。一しきり水夫の威勢の好い叫び聲、錨を巻き上げる響底力のある氣笛續いて起る僅かな振動と共に、三千噸を超ゆる新羅丸は下關の阜場を緩やかに離れたのである。時に夜の九時半。門司の淡い電燈の光が、水に落した影と共に、次第に遠く靄の彼方に消えゆく時、故郷を離れる心の痛みは前途の壯舉によつて慰せ

られべうも無かつたのである。静かな海は朧月の光によつて益々美しく銀波を碎いて居る。蒸暑い三等室を避けて上甲板の涼風に襟を吹かせの氣持好さ。曉のはの暗い時に對島を遙か左に見て、釜山に着いたのが四日朝九時。コレラの爲檢便とあつて、船は遠く沖合に錨を下して動かぬ大陸の鼻を目の前に控へながら、上陸出来ぬとは……折から降つて來た細雨、不愉快な一日は船の中で過ぎた。夜の八時頃漸く上陸を許された。先着の青木、深堀、井上、三君と會ふ。夜中龍頭山に登つて釜山の町を望み、その夜の汽車で京城へ向ふ。

廣軌の初旅――

始めて大陸の一角を踏んだと云ふ自覺は、何と云つても目馴れぬ朝鮮人の白衣、聞き馴れぬ痞高い話し聲によつて呼び起される男は麻の緩い上衣服に黒い粗く編んだ帽を冠つて居る。

骨組の大きい顔、長い二三尺もあらうかと思はれる煙管から吸ひ取つた煙を鬚髯の多い口鼻からの

んきそうに吹いて居る。女は胸迄の上衣と袴、髪は二つに分けて結び、布を巻いて居るものもある。一見嫁御の綿帽の様に。皮膚はきれいで美人が多い。汚れない糊がついて、光澤のある衣服。と云ふ處迄は甚だ好いがその一種の臭氣でうんざりする。側に座られた以上仕方がない。有難く餘香を拜して居る内に勝手の方らぬ廣軌の列車は總てを包んで雨の中を北上した。朝眼が覺めても汽車は尙走つて居る。右を見ても、左を見ても、赤土の顯はれを不快な丘陵の合間合間に、不毛の草地は多いが、米麥諸等の耕作地にも尙改良の餘地を見せて居る。唯水田の中に白鷺の降りて居るのは一寸目新しく原始的だ。

京城の一日――

五日 午前九時半汽車が京城のプラットホームに緩やかに入つた時、吾郷松村兩君の出迎を受ける。アスファルトを布きつめた停車場前の大通には先づ鳶の生れた偉大な南大門が控へて居る。

煉瓦石造の家屋櫛比の間に坐して、獨り冷やかに古の文明を物語て居る。兎に角と云ふので壽町の原金旅館に尻を据へて午後雨を冒して先づ動物園に足を運ぶ。東洋第一の名があるだけあつて珍らしいものが多い。内地の鴉の更りに飛び廻つて居る鵲も、こううちや／＼居てはちつとも風流氣がない。

お隣の博物館と植物園、三者共に古の宮殿の一部である。霞む新緑の間を縫ふて、清い砂の道を廻る。紋を刻んだ池の面に浮ぶ蓮の葉を賞する。歸路バコダ公園に立寄つて夕刻宿に歸る。

朝鮮ボーイ――

六日 天氣は曇だが汽船の都合があるので金剛山行を決行した。が天は吾等に幸を下し給はなかつた。雨期に相當する天候は元山に於て二夜の籠城を餘儀なくせしめられた。

涙を吞んで八日夜再び京城へ引き返したことは、此處に記するに忍びぬ。此事は省略する。唯浩浩たる朝鮮中部の高原の中を汽車が走る時、何里行つ

ても更に人家を見ぬ草原の中には、赤いなよ／＼な百合や、紫のあやめが、その美を誇る人にも遇はず、母なる自然の廣い胸に抱かれて、獨り咲き獨り萎む孤獨の生涯を送つて居るのを忘れてはならぬ。或は冬白雪千里の野に化することありと。或は秋の草色つく時、鹿、猪、等の走るを見ることありと。話は車中の朝鮮ボーイを相手にして以外に進んだのである。

それからもう一つ記し置きたいことがある。

元山からの歸路李朝太祖の創建で傑僧無學の開基である云ふ有名な寺院雪峰山釋王寺に立寄つたことである。細やかな驛で降りて傘を片手に、一里程奥の山の中、日本人の家とて更に見當らぬ。片田舎の朝鮮家屋は低い床荒削りの曲つた柱、不器用な藁葺と云ふ様だがその柱に書かれた文句が面白い。

雲峰上下此景地

和風甘雨豊年瑞

四時佳興々人同

周禮文章万樹花

和氣自生君子家……

……とは宿屋である

酷飯方知日月長

借寓東西南北人

浩歌不覺乾坤少

千里逢迎高明滿座

……とは酒屋である。

歩くにつれて清流がある。清流があれば必ず朝鮮婦人の獨特の洗濯が目止るのである。一尺許りの丸木で岩の上で汚れ物をたたくのであるが、そのたたく音が頗る風變りである。内地でいへばきぬたの音とでも譬ふべきであらう。止まんとすれども續き、續くも亦止まんとする音は、曇つた静かな空氣を震はせて遠近から響き來るのである。溪流に沿ふて上ること數町愈々仙境に入る。殿堂の數多く總て奇麗を盡して居る。案内をしてくれた十四五の男の子、流暢な日本語で、説明の勞を取つた。

洪水から免れて――

一体に雨の少ない朝鮮では、一朝此時分の様に雨が降り續くと大變である。京城の邊を流れて居る漢江は増水四十尺。水は手前の丘陵から數哩を距つた向ふの山の麓迄、野も畑も森も林も浸して唯見ゆるものは、電柱と森小立の頭のみである。

家を失ひ家族から離れて、哀れな運命に弄ばれて居る者は勿論数多いが、惡魔の手は進んで京城の電燈電車瓦斯水道に及んだのである此の日(九日)吾等は先づ物産館を廻り、景福宮を拜觀したのである。昔ながらの勤政殿や思政殿、嘗ては文武百官の居並んだ庭も、今は唯苦むして、轉た今昔の感を深からしめる。偉大な石の柱のある會慶樓に登れば、樓を廻らす清池の面に落つる水蓮の影が鴨の一群が近づくにつれて笑つては碎け、碎けては又結ぶのである。宮内の博物館を見て中食に宿に歸る。

午後は滅多に拜觀を許されぬ秘苑即ち現在の王宮である。幸に李王職次官に紹介狀があつたので、入を得て満足之に過ぐるものはない。

劈頭良殿下の自動車で仁政殿に向はせらるゝを拜したのである。道は小暗い小林を潜つて池畔に出た。山水自然の勢を利用した苑は、松林あり、池亭あり。即ち名づけて宙合樓と云ふ。尙奥の殿は古の後宮である。葉末から落つる雨垂の外には、寂として音せぬ庭に獨り佇むと、美しい宮女連

が、しめやかに振舞つた昔の面影が想ひ起される辭して歸路南山に登る。霞む北韓山を背景として次第に黒づんで行く京城の町。古の朝鮮の首府として勢力のあつた都嘗ては花房公使や竹添井々諸士の憾殘る都に、最後の別れを告げたのである。その夜十時半の汽車は七人を乗せて走つた。

石に眼のある町——

洪水の爲汽車は二時間と云ふ遅延を見せて、十日朝七時過平壤に着いた。三根旅館に本居を構へて、先づ當地居住の友山下君に案内を願ひ、忠魂碑から瑞氣山を降り、市内の朝鮮人の第一普通學校を參觀した。愛想の好い鮮人の先生が御勝手に御覽下さいと云ふ。適れ教育家になりすまして、一年の邦語、二年の國語、三年の理科等を見た。

教科書は國定教科書を教ふる外に、朝鮮語の時間があるのだ。それで日本語の上手なこと實に驚くべきで、書畫も亦達者である。學校で唯一の日本人たる校長先生と會談して、鮮人普通教育の現在と將來との意見を伺つて辭した。

平壤の町は朝鮮人が甚だ多い。殊に北の方面は、全部鮮人家のみである。白い衣服の鮮人の影が、長い煙管の煙に燻つて、愈々暢んびりした氣分を漂はせてゐる。つい此の間不逞鮮人動亂も此處の鐘樓が中心になつたとの事である。成程道の側に人の丈より大きな鐘がある。

奇妙に人に當る平壤の石は、やがて眼のある石の名を得たのである。

町外れから少し松林を分けて登ると箕子の廟がある。歴史の寫眞に出て居るのと變つたことはない。門に待つて居た番人、好い鳥が籠に入つたと云ふ顔付で、塵だらけの机の上に一圓と書いた。

こちらにも鮮人の圖々しいのには馴れて居る。早速返報に十錢と書く。彼奴侮り難い相手と見取つてか急に哀願的に出て來た。家に小さい子供が病氣で居るから粟飯位は食はせねばならぬからと。仕方がないから三拾錢を奮發する。直ちに乙密台に登る。絶頂の四虛亭展望廣濶、近くは平壤の町を一眸の内に收め、遠くは大同江を距て、寺洞炭礦の煙廣野に靡くを見る。玄武門、牡丹台、共に日

清戦役に有明な處、密かに當時を追懷して山を下れば、浮碧樓あり。山紫水明の地と云ふべき處。歩を大同江岸に運び、大同門を潜り、宿に歸りしは午後三時

汽車の中――

十一日 久し振に天氣晴朗だ朝の五時半から又汽車の旅である、一巡車中を見渡すと、皆此れ沈黙の羅漢さんである。筋向ふに座つて居る二十貫もあらうと云ふ巡查、三十年式の鐵砲を持つて居る。此奴恰好の話相手と早速質問の矢を放つと、案に違はず話は意外に進展した。彼は近頃不逞鮮人が國境方面で暴れるので、今召集されて、百發の實彈を携へて征伐に行く處だそうな。

「それは君。面白いですよ。彼等不逞の奴共が何を仕出かすのですか。皆金を集めたい許りに、あんなことをふれ出すのですよ。何しろ鮮人は足が弱いから、柔道で足を拂ふと、ゴロ／＼轉びますよ。然しすいぶん剛情で恥知らずですからね。盗人して物品を突きつけられても空とぼけてる奴

が居るし、盜をしても歸してやつたから良いぢやないかと、逆捻に突かゝつて來る奴が居る。何言葉ですつて。もう一年もこちらに居ますから大低の用は足りますね。田舎を廻るとやつぱり鮮人の家に泊つて、鮮人の食物を食ひますがね。不味くてとても食ひんですよ。家は臭くて、それも便所が無いんでね。無いんぢやない。自分で一つづつ瓶を室の中に持つて居るので……」彼は豪傑笑をして長い顎ひげを撫で下した。

國境を越えて――

轟々たる音しばし天地を震撼せしめて居る汽車は今しも日本國土を離れつゝあるのである。然り。目ざす鴨綠江は目下に流れて居るのだ。心自ら躍如たるのである。安東の驛で一吋税關の檢べを受けてから外へ出る。嗚呼もう外國の地を踏んで居るのか。何もかも夢の様に來てしまつた。

故郷の空を見やつて獨り想に耽つたのである。が直ぐに大陸の強い光線に、くつきりと浮き出したポプラの並木は、吾等の心目を引いた。時に十一

時少し過ぎて居る。之を滿洲時間にすればまだ十時だ。腹の虫は十一時の積りなのに、十時だと納得せしむるのは仲々難かしい。兎に角晝食を終へて、當地材木公司コンスの長の大津氏の家を訪れて、製材工場の見學を許された。すぐ裏の鎮江公園に登ると、遠くは鴨綠江の彼方に霞む新義州、近くは日支勢力の折衝が明かにわかる日本街と支那街總てが手に取る様に見わる。山を降りて鐵道を渡る時に目に入つた「小心火車」の語、一寸異國情緒の氣分になる。材木公司以大きな材木が、後から後へとどん／＼切つたり削つたりされるのを見てから、愈々鐵橋の徒渡初をした。安東の側には税關。新義州には衛兵駐屯所と巡查派出所があつて警備物々しい。吾國の兵士が絶えず橋上を警備して居るのは如何にも心丈夫だ。橋を渡ると三四人の巡查が一人の鮮人を捕へて何か苦情を云つて居る。總て此川の通行は、鮮人に對して嚴重だ。特にその荷物の檢査が嚴しい。日本人支那人より一等劣つた人民として取扱れる心中亦哀れむべき點もあるだらう。守備司令に面會して、橋梁の廻

轉台の上に乗せてもらふ約束をした。が漸やくすると赤い旗が昇つた。即ち風の爲橋梁が開かぬ信號である。司令は氣の毒がつて自ら説明すべく案内して呉れた。橋は右側通行である。總て大陸は右側通行を忘れてはならぬ。近日雨の少ない爲、彼の有名な流す筏は殆んど見になかつたけれども支那式の船舶が、橋を林の様に並べて錨を下して居るのが見わる。帆を順風に孕ませて降つて來るものもある。足の下は滔々たる水が、恐ろしく大きな橋柱に突當つて、漣を立てゝ居る。司令が九連城を指して日露の戰の事や、冬の氷の張つた景色の事など、手に取る様に話してくれた。かくして四千呎の橋は渡られた。

安東に來て始めて支那町を見た。店がある。競賣がある。胡弓に合せて大聲で歌つて居る者のがある。總てが珍らしく、總てが活氣に満ちて居る、これが朝鮮人と異なり且優る所であらう。夜十時の汽車で出發した。

撫順から奉天へ――

本溪湖附近から、黒い夜の幕は次第に取拂はれて

再び目新らしい景色が展開しつゝある。汽車は狭苦しい山間を縫ふて廣い廣い滿洲の野原を目蒐けて疾驅して居るのだ、山もない。丘もない。唯見ゆるものは緑の海原と半球の虚空とのみである。高粱畑に漂ふ波は、如處迄打ち寄せて盡きることであらうか。蘇家屯で乗換へて、九時に撫順に着く即ち十二日だ。血氣盛んな工業町としての撫順は幅廣い道、刈込んだポプラの並木。堂々たる煉瓦の家屋それに加ふるに廣軌の電車、總てが大規模であり總てが心地よい。朝食を終へてから鑛山事務所に至り、次長田島氏に面談を乞ひ、見學を許された電車待合所で待つて居ると、「日本人待合所」と云ふのが目につく。苟くも外國の土地でありながらこんな標があるのは、如何に日本人が偉大な勢力を持つて居るかを示すと同時に、如何に支那人が踏み躪られ、侮辱せられて居るかを知らに足るのである。氣持の良い電車に、小學校通學の子供連と戯れながら乗て居る内に、大山坑に着いた。すぐに鑿坑のエレベーターの車の廻つて居る高い塔が目につく。導かれて先づ灑砂充填を見

る。斜になつた地下道を大分に下ると、水の出る管がある、砂を導く管がある。此等が集つて遂には非常な勢となつて流れてもと鑿つた穴を塞ぐのである。心地の悪い地下坑内は、全く轟々たる音響によつて満たされた。次には石炭が運び出され運ばれる所に導かれた。動く機械の休み無きと同時に、運び出される石炭も滞ることがない。

聞く處に依ると、此の所で日日掘り出される七千噸の石炭は、運び切れずに残つて居ると。晝飯の後、モンド瓦斯發生爐並びに發電所を見る。次第に目に見えて變化して行く石炭のエネルギーは、遂には電車となり電氣となつて現はれて來るのである。最後に有名な露天堀に至る。直經何十間と云ふ大きな穴は、幾重にもトロツコの道が下の方へ通じて居て、ダイナマイトで爆發しては車に積んで引き上げられる有様、丁度蟻が食物を運ぶ様に働いて居る坑夫、總て手に取る様に見える。辭して汽車に乗つたのは午後四時。その日は始めて滿洲の地奉天で、目覺勝な眠を結んだのである夢に浮ぶは故里か、將た唐國か。

奉天見物

最も繁華にして、最も支那人の勢力ある滿洲の市街として、第一に指を折るべき奉天は、數丈の高さに及んで居る大城壁によつて、十七萬の住民が包まれて居る。流石は張作霖の御膝元だけあつて人馬の交通車馬の往來頗る盛んだ。日本人も此處へ來ると、影を潜めて居る。折も折張の出兵説が喧ましく市内は戒嚴令が布かれて居る。銃を持つた水色の服の兵、貧弱な巡查さんが其處此處に張番をして居る。一方には應募兵らしい士官兵卒が汗みごろ息せき切つて此の方からどん／＼集つて來る。と云ふ日に、奉天見物と洒落れ込んだのである。

その日(十三日)朝から風交りの雨だ。珍らしい甘雨として皆んな嬉んで居る。どうも雨に縁がある旅行だ。ゆつくりと床の中で寢て居ると、物賣りがやつて來る。「どうり賣買」と云ふ日支合併の呼聲が、雨に濕つた建物の間を、すきとほつた音波となつて響いて來る。雨に濡れてポプラの並木が映つて來るアスファルトの道を軽く歩む。此の

處は城外の日本人町で、町幅も廣ければ、大廈も櫛比して居る。防寒の爲であらう。總て煉瓦作りで、二重ガラズ。それに必ず備付ストープがある。先ず領事館に漕ぎ着けて副領事の方に面會した。みすばらしい書生を、堂々たる外交會議の行はれる大應接室に案内して、滿洲から奉天。蒙古から支那。外交から張作霖の事迄も審らかに御話して下さつた勞を萬謝するのである。現今北京は戰雲の中心である事、北京漢口間も、北京浦口間も鐵道が破壊されて居ること。等支那内地旅行は危險である事。遂に支那旅行を思ひ止つたのは此の時である。奉天の名所としての舊宮殿と、北陵とは共に日本領事館からの拜觀許可證を要するのである。そしてこの證と引替に、交渉公署から拜觀證を貰ふのである。領事館を出た。教へらるゝが儘に馬車を傭ふことにする。馬車屋を呼び止めて、書付を見せて公署から北陵に廻れと命じた。處が奴さん指を四本出して四圓だと合圖する。宿で聞いて來たの倍だ。二圓に負けさせやうとしたが悲しい哉言葉が出ない。向ふは分らぬ事を無闇と喋

る其内に彌次馬が澤山寄つて來る。もう絶体絶命だ。と云ふ所ろに救ひの女神が現れた。女神ぢやない。五十許の婆さん。熊本の柿田さんの御親戚で奉天に居られるお醫者様の處に居るのださうなこんな所の救ひ主は、柿田さんより利目があつて有難い。群る敵兵を押しのけて、雄辯を振つて馬車屋と掛合つて呉れたが、相手も仲々屈しない。遂に巡查迄引張込んで裁判沙汰と迄なつたが、巡查も半分位やつて置けば宜敷からうと云つて空トボけて居る。談判破裂。中食に宿に歸る。腹癒せに自働車を馳つて城内に至る。公署で許可證を貰つて早速宮殿に出かける。宮殿は清の太祖高皇帝及び太宗文皇帝の宮居した所である。門番の兵士に許可證を與へて内へ入る。門の鍵を持つて居る奴「ビヤウ〜」と云ふ。どうもさつきの票（許可證）が入用らしい。仕方がないから又逆つて交渉すると渡してくれぬ。圓いものが欲しいらしい。攻撃の方法を易ねて、十錢銀貨を出して、彼の掌に置く。彼笑つて票を我手に委す。明々の中に賄賂行はれ、獸々の中に賣買行はる。一國の兵

士然り。況んや下司に於てをや。表門を入ると又次の門がある。三人來て酒代に三角(三十錢)呉れど地に書く。吾又陳腐な漢文を持出して後で遣るからと書く。どうしても聞かぬ。三十錢を與へて中へ入る。宮殿と云つても、唯中身の無い、ヒツソリカンとしたがらん堂である。右左の飛龍閣と翔鳳閣との中央に正殿がある。崇政殿と云ひ、往時皇帝の群臣を召して政を聽かれた所である。その奥に鳳凰樓、清寧宮等がある。いづれも頽廢の跡を忍ぶのみである。

直ちに北陵へと急いだ。雨は晝前から止んだが支那町の泥濘濘を沒すと云ふも、少しも誇張ではない。一里半の道漸く北陵に至る。門を入つて磧道を進めば左右に豹獅馬駱駝象等の石像があつて碑閣に至る。二丈もある城壁に登ると、樹木の按配宜しきを得た庭園が一眸の内に收められる。その後の丘が即ち大正文皇帝の寢陵である。御陵としては美を盡したものである。

陵を辞したのは既に夕陽傾いて、暮靄四顧を罩めんとして居る時であつた。有名な滿洲の赤い夕

日は、昔に變らぬ赤い光線を投げて、森の彼方に落ちた。次第に灰色の増して行く半空に對しては眼の及ぶ限り、高粱畑があるのみ。その間、遙か行手の森影にチラリホラリ見ゆるのは、今宵の宿奉天城外の燈である。歩するにつれて、小川がゆつたりと流れて居る。牛や野羊を逐ふて居る小供が来る。その鋭い鞭の音は、高粱を撫でる風の音に對して、一種の緊張した響を送つて来る。

偉大なる力を有する大平原、今將に一日の務を終へて、やがて来る夜の神の手を捕へて、愛し子の様に、靜かな眠に落つることであらう。悠久なる大平原の夕。飽く迄心に銘しながら、疲れの足を運んだ。

大連へ――

十四日 輝く朝日を背に受けて大連に向けて出發した。渾河の長い鐵橋を渡つて、日露の役で名高い遼陽や首山を左に見て、汽車は遂に平野を離れて、再び丘陵の多い山間を走る。小さな驛に着く毎に、澤山の支那人が乗降する。が皆んな支那

人特別の列車だから、吾等には一向關係がない。支那人の車が特別なのではない。日本人の列車が日本人専用なのだ。これ位滿鐵の勢力は盛んだ。それのみではない。町に着くと、町を作つたのが即ち滿鐵だ。電氣、電車、瓦斯水道皆んな滿鐵の御世話になつて居る。學校がある。病院がある。皆滿鐵だ外交權と軍隊權のみを持たぬ滿鐵の徽章は何處でも見ることが出来る。晝に大石橋を通り夕刻金州城を遠望して、六時半大連の町に着く。

さらば友よ――

旅行は遺憾ながら此地で解散を餘儀なくせられた

一通りの大連附近見學――即ち埠頭から製油所中央試験所、窯業工場、が一日、沙河口工場、星ヶ浦が一日、その他老虎灘見物、旅順往復が一日――が終へて各自自由行動を取る事にした。汽車で歸る者もある。汽船で歸る者もある。青島へ行く者、上海へ廻る者、面白い話は以後尙續くであらうがそれは又機會の折に發表することにして、不幸は多いが過の無かつた旅行の稿を、閉づることにする。